
黒、白。

antinomy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒、白。

【Nコード】

N2518S

【作者名】

antimony

【あらすじ】

アンチノミー
矛盾は生死を操る神のような存在であった。彼は人を改心させるために
短編から派生した連載です。

人物紹介。 < 8 / 2 1 更新 > (前書き)

ネタバレ。挿絵あり。

0 5 / 2 9 挿絵のサイズ変えました！

0 7 / 2 9 挿絵を書き直す

0 8 / 2 1 娘っ子追加

人物紹介。

< 8 / 2 1 更新 >

神ゴッド

> i 2 8 2 8 7 — 2 2 0 7 <

一番上にいるが、実質出てくるのは十三話から。
名前のとおり、神。

下界（人間界）での名は「全夜ぜんや神乃かの」

> i 2 8 4 0 9 — 2 2 0 7 <

ゴッドの姉。

人だった頃の記憶があるため、ゴッドより有望だが神になれず。

矛盾アンチノミー

> i 2 8 2 8 1 — 2 2 0 7 <

自由な活動家。

基本一人称は「俺」

下界（人間界）での名は「矛盾ぼごさか盾じゆん」

絶無ゼロ

> i 2 8 2 8 2 — 2 2 0 7 <

ペテン師という不思議な力をもつ少年。

一人称は「僕」

難問アホリア

> i 2 8 2 8 3 — 2 2 0 7 <
掟にうるさい堅物。
エタニティに弱い？

パラドックス
逆説

> i 2 8 2 8 4 — 2 2 0 7 <
無口な正論家。

エタニティ
永久

> i 2 8 2 8 5 — 2 2 0 7 <
神に等しい人間としては、珍しい女性。
下界（人間界）での名は「永野^{ながの}とわ」

フォーチュン
運命

> i 2 8 2 8 6 — 2 2 0 7 <
元、人間。

えんまだいおう
閻魔大王

> i 2 8 5 6 9 — 2 2 0 7 <
ゴッドの幼馴染。 地獄の支配者（？）

あくじきむすめ
悪食娘

> i 2 9 2 4 5 — 2 2 0 7 <
人の肉を好んで食らう。

完璧娘 かんぺきむすめ

> i29246 — 2207 <

インボツシブル

不可能を所有する。 悪食と仲良し？

容姿、頭脳、その他共に完璧。

人物紹介。 < 8 / 2 1 更新 > (後書き)

下手なのはしょうがねえよもつ。

存在。

「残念だ、あなたには改心の余地がない」

「ひっ！？やめてくれ！まだ死にたくない！！」

「やあ、^{アンチノミー}矛盾。今日もまた殺人？」

「変な言いがかりはやめてくれ、^{ゼロ}絶無。改心だよ」

「ふうーん」

彼、アンチノミーは生死を司る神のような存在。

その力を活かし、人々らを改心へと導いている。

そして、ゼロと呼ばれた……

性別は不明なので彼、と仮定しよう。

彼は、何も司らない。

彼曰く弱者こそ最強、らしい。

「こんどは僕も連れてってよ」

「遊びじゃないんだ」

「ちえ」

「そういえば、^{アホリア}難問が呼んでたよ。

見かけたら呼んでおけって言われたし」

「見なかったことにするのが礼儀ってもんじゃないのか」

「ふうん……」

そういつて、ゼロは不意に姿を消した。

「あいつはやっぱり敵に回したくないな」

「おい、アンチノミー！！」

「なっ、アポリア!?」

「ゼロから聞いたぞ! また人を殺めたんだな?」

「.....」

「あれほど、ダメだといったはずだ! お前は規則をちゃんと守れ! 私たちは特殊な力を神から授かったのだそれぐらい、と説教を始めた。」

「分かっている、分かっている!」

「何.....? それが人を殺めたものが言う台詞か?」

「うるさいな。お前は掟に縛られすぎだ。少しは自由になれ」

アンチノミーは後ろを向いて帰る仕草をした。

それを止めようとアポリアが動く。

「アポリア、ダメでしょ」

上からゼロが落ちてきた。

「それも掟に入ってる。違っつけ? 仲間同士の喧嘩は認めない、だよね」

「.....、お前はいつもいいとことりだな」

「何も無いもん、それぐらい、いいじゃない?」

につこり笑った。

「ねえ、アンチノミー。行くんでしょ?

僕もいくよ。今度は成功に収めようね」

「ゼロが行くなら、私は了承しよう」

すんなりとアポリアも許しをくれた。

「仕方ないな」

存在。(後書き)

アポリアはTartleさん【<http://mypage.syosetu.com/127554/>】からいただきました。
頂いた方には連載としまして。続くといいです。

始まり。(前書き)

アンチノミー
矛盾

自由な活動家。

ゼロ
絶無

不思議な少年。

アホリア
難問

掟にうるさい。

パラドックス
逆説

無口な正論家。

始まり。

「……………ん？あ、パラドックス逆説。二人を知らないか？」

「……………」

「つと、外出中だったな」

「見つからないね」

「当たり前だ。そうそうと改心させたいような悪い人間はいない」

「じゃあ、僕が作るうか」

「やめろ」

真面目に答えたアンチノミーを無視するかのように

ゼロは「あはは」と笑ってみせた。

「ところで」

と、アンチノミーが。

「お前、なんであいつらが怖がるような存在なんだ？」

「……………えへへ」

「答えろよ」

アンチノミーは、知らないらしい。

「僕の、存在を」

「何か言ったか？」

昔、昔。

地獄と天国。

そしてそれをつなぐ一本の道が存在した刻^{トキ}。
出来事は起きた。

地獄。
(前書き)

アンチノミー
矛盾

自由な活動家。

ゼロ
絶無

不思議な少年。

アホリア
難問

掟にうるさい。

パラドックス
逆説

無口な正論家。

地獄。

その、“世界”に彼、ゼロはいた。

彼は大罪を犯し、投獄される場所だった。

「ねーえ、お空が見たいよお」

「うるさい、黙ってここに入れ」

「お空あ」

死んだ魚のような目。

まるで。全てを見下すような。

彼の犯した、罪は。

人間界での人類の大虐殺だった。

自分のペテン師エンバスターと言う能力を用いて………！

「いい加減、はいてくれないか？」

「やーですよ。誰が自分の手の内を晒すと？」

「……………くっ」

地獄では。

今、ゼロの能力の取り調べを行なっているところだったが。

中々彼がはいてくれない所為で次にいけないのだ。

「せめて能力名でも、な？」

「黙れ」

特殊な手錠をしていた両手はいつの間にか外れていた。

その手は取り調べしている男に向けられていた。

「知りたいなら、試そうか？あんだで」

「………」

「嘘だよ。そうだな、じゃあ三日後。」

ここにアンチノミーってやつ連れてきてよ」

「あ、アンチノミー？」

「そんじゃあね」

ゼロはいつのまにか透明の取調室から出ていた。

彼の座っていた椅子には、違う男が拘束され座っていた。

「な!？」

「その間僕は地獄でひまつぶししてるね。」

男へ向けた笑顔は悪魔のような、否。

“そんなちっぽけな比喻よりも” “悪魔そのものだった”。

地獄。(後書き)

最近よく設定資料をなくします。

あれ、このあとがき前もかいたぞ。違う奴に。

記憶力が低下してるなー 　　いつか小説も書けなくなるかも。

三日後。(前書き)

アンチノミー
矛盾

自由な活動家。

絶無^{ゼロ}

不思議な少年。

アホリア
難問

掟にうるさい。

パラドックス
逆説

無口な正論家。

三日後。

三日後。

「ねえ、まだ？」

「ま、まだだ！」

アンチノミーは現れない。

「地獄長！やはり、彼の言うアンチノミーとやらは架空の人物では？」

「う、うるさい！いいからさっさと探せ」

「は、はい」

ゼロは壁にもたれかかり、腕を組つつ微笑んでいた。

「ふふ。」

「何がおかしい。」

「別に？」

「クソッ」

一時間弱経ったところで、ゼロが口を開けた。

「お前ら、どこ探してるの？」

「は？」

「あなたの部下だよ。そんなところにはいない」

「何を……言う？」

「地獄中探してるじゃないか」

と言って右手の人差し指を立てた。

すると光が発生し、地獄マップへと変化した。

「なっ！？」

「赤いのがあなたの部下。」

ほらほら、サボってる。あんたさあ、人望ないんじゃない？」

ケラケラ笑う。

「ど、どういうことだ？地獄にいるんじゃないのか」

「おお、部下は無視ですか。まあいいけどね。」

これまた笑う。

そしてマップをしまい、また腕組む。

見た目が少年なので、様にならない。

「閻魔大王様なら知ってるかな。“神に等しき存在”を」

「……………」

「おっと、お喋りが過ぎたね。お腹すいたしそこらへんで遊んでくるよ」

「さて」

その一言で部屋から出ようとするゼロが止まる。

「……………なんですか」と嫌々答える。

「神に等しい？どういうことだ！」

「そのままですよ」

「改心の神、か？」

「ご名答」

それを言うと共に指フィンガーパッチンする。

牢獄服だったゼロの服装は一変。

「これが僕の普段着。」

ニッコリと微笑んでそういう。

「ちょうど、アンチノミーも着いたみたいだしね。ありがとう」

愉快的暇潰しになったよ、と笑う。

「ど、どういうことだ!？」

「時間稼ぎが必要だったのさ」

「アンチノミー！」

「よっ」

削除。(前書き)

アンチノミー
矛盾

自由な活動家。

ゼロ
絶無

不思議な少年。

エンバスター
ペテン師。

アボリア
難問

掟にうるさい。

パラドックス
逆説

無口な正論家。

削除。

「おい、まて！」

お前はここで永遠に罪を償わなければならないんだぞ！」

「……おい、地獄長、お前何を言う？」

「で、ですからアンチノミー様。彼は大虐殺という罪を……」

「フツ、ハハハ！地獄長。貴方はまんまと騙されてる。」

「は？」

男は足を止める。

「そんなの、彼のペン^{エンバスター}師で作り出した偽嚙でしょう」

「なっ！？にせ……ばなし！？」

「貴方の罪人名簿をご覧なさい。」

男は言われるがまま、手帳を開く。

大きく“絶無^{ゼロ}”と書いてあった大罪者名簿には

“そんなは名前なかった。”

「どうでしょう？」

「し、信じられんぞ！」

「それが、もう一つの考えがありますね。」

「何？」

「実際に罪を犯したが、それは彼の能力^{エンバスター}によって削除された」

「……ッ！」

「その二つで考えるのが無難ですね」

やれやれ、と肩をすくめる。

「まあ、どっちにしろ。彼はここ^{ゼロ}にはいけないそんぞ

ゴゴオオオン、と地鳴り。

「な、なんだ！？」

「ま……さか！」

血相を変えてアンチノミーは走り出す。

「つと、地獄長。お願いです。」

部下を集め、頑丈な場所にこもってください。頼みますよ

「え？あ……、了解しました！」

「ゼロ！何をしている！」

「！ なあんだアンチノミーか」

「そ、それは、天国と地獄をつなぐ一本の道……」

「これ、こつしたら楽しそうだね」

「やめろ！」

その道は、だんだんと崩れていく。

あの道が崩れれば、治安と環境が維持できない！

終わりと始まり。

ゼロが理性を取り戻した頃には地獄と天国をつなぐ一本の道は
跡形もなくなっていた。

「あんちのみー？」

「……………俺はそんな発音じゃない。“アンチノミー
”だ」

「エヘヘー、疲れちゃった」

と言つて倒れこんだ。

「ツチ。後片付けは俺、か」

そこにパラドックス、アポリア……と、女性らしき人物が駆け
つけてきた。

「ど、どういうことだ、アンチノミー！！」

ゼロをこんな状態にしておき、更には道まで！！」

「俺のせいだよ！？」

「戯言だ。片付けるぞ」

あの一本の道が消失した所為で、地獄の治安は悪くなった。

それに反比例し、天国は最高と言つてもいいほど樂園のような治安
になった。

そう、今、よく知られているような治安。

昔は平均して同じような治安だったのだがな

とアンチノミーが振り返る。

当のゼロは人間界巡りに疲れ、アンチノミーの背中であぐらをかいて寝ていた。
「ったく」

と嘆息した。

「おい、ついたぞ」

「あら、アンチノミー」

「……………えと、誰？」

「あら？天地一本道事件でお世話になった永久よ？」
エタニティ

「エタニティ？」

物覚えが悪いのね、と怒らせた。

腰まで、否、それ以上の綺麗な髪をふわりとなびかせ近寄る。

「うふ。怯えなくていいわよ。可愛いわね」

と言いながらアンチノミーの頬を指先でなぞる。

「おい、エタニティ！！ふ、ふ、不謹慎だぞ」

「まだ何もしてないわよ……………じゃあねっ？」

ニツコリと無邪気に微笑んで去っていった。

「な、な、なんだ……………？」

「えっへへー、アンチノミー赤くなってる」

背中にいるはずのゼロはなぜが降りていて、アンチノミーを冷やかす。

「るせえ、だまれ！」

終わりと始まり。(後書き)

挿絵書こうと思います

誰からも。

「ねえ」

いきなり後ろから、エタニティが話しかけてきた。

「!？」

ひどく驚いていたのを見て、エタニティは微笑んだ。

「そこまで驚くことないじゃない。私を覚えてる？」

「昨日話したばかりだろう……」

嘆息しつつ返答した。

「赤くならなくていいわよ？別に何もしないわ」

「……ッ」

「もう、探すの大変だったのよ？」

「そうらしくは見えないが？」

うふふ、と微笑んで続けた。

「そう、かしらね」

不敵に微笑んでその場を去ろうとする。

「おい、俺に話があったんじゃないかったのか？」

「別に？話したかっただけよ？」

なんなんだ？あの女……

はあ、とまた嘆息した。

「あ、あとね」

びた、と止まる。

「ため息ばかりだと、幸せ逃げるよ」

「余計なお世話だ」

「エタニテイ、お前どこに行ってた？」

「もう、厳しいわね、アポリアは……」

「アンチノミーに会いに行ってないよな？」

「関係ないじゃない」

そういつてアポリアを睨む。

「いくら彼の能力が危ないからって、私の能力の前では無効のはずよ？」

そういうの杞憂っていうのよ。知ってたかしら？」

「それぐらい……」

「だったらご託なんてもつての外だわ」

肩をすくめてみせた。

心底本当に飽き飽きしているらしい。

「だ、だが……」

「うるさいわね！しつこいって言うてんの！貴方も閉じ込めるわよ」

「………ッ」

「私は“永久”よ。自由に永遠に生きるの。誰からも縛られずに、ね」

人間界。(前書き)

ごめんなさい。

ミスうpしてました

人間界。

「暇だわ」

唐突に彼女はそう言った。

「ねえ、アンチノミー」

そして、話の矛先をアンチノミーにした。

「人間界いきましょ」

「駄目だああああ！！！ダメに決まってる」

「なによ、アポリア。貴方いつからアンチノミーになったの？」

「う、うるさい！私をこんな奴と一緒にするな」

ひっでえな、とアンチノミーがつぶやく。

それを睨みつつ、エタニテイに話した。

「君が人間にあつてみる。時間が大変になつてしまつ」

「ひどいわね。これでも制御出来るの。」

昔と同じにしないで、と軽く怒る。

「アンチノミーがダメつて言うなら、諦めるわ」

「いいぜ」

「やった」

「ちよつとまてえい！」

「何よ」

はあ、と嘆息し続ける。

「この間のゼロのこともあつたんだ、控えて……………」

「嫌よ。じゃあ、仕事くださあい」

うっ、と一歩下がる。

急にエタニテイが戻つてきたせいで、仕事が逆に減つてしまった。

アンチノミーは下界にんげんかいに降りねば仕事はできない。

「ついてって、いいわよね」

「……………はい」

不幸少女、青。

『それとね、アポリア。意味も無く向かう訳じゃないの』
アポリアはその言葉に首を傾げた。

『ほらあ、今話題でしょ』

『な!』

『だからあ、代わりにあれかして!』

「んー! 久々の外!」

「僕は昨日ぶりだけどねー」

皮肉げに笑う。

それを聞いて気を悪くしたエタニティはアンチノミーにあたった。

「ねーえ、アイス買ってよおお」

子供か。

「ダメだ」

「なんでー?」

「というか、下界に降りた本当の理由はなんだ」

話そらしたし。

エタニティは妙に真剣な顔になる。

「バレてる?」

と、口ではおちゃめに言うが、顔は真剣そのものだ。

「門出満ちゃんを探しててね」

「門出え?」

ゼロが反応した。

「どおつかで聞いた名前だなー、なんだっけ、エタニティ」

「不幸少女」

「!!」

「そういえば分かるかな？」

ゼロたち二人の顔つきも変わる。

「どっかのアニメの地獄なんたら現実版って聞いたぜ」
アンチノミーが言う。

アニメも知ってるのだろうか。

「それより良くない話よ」

肩をすくめてみせた。

相当な人間らしい。

「彼女は、私達に匹敵するものを、必ず持っている」

「どういう、意味だ？」

「アポリア情報よ。彼から聞いたの」

アポリアという単語を聞き、アンチノミーは顔をしかめた。
よほど嫌いなのか。

ゼロが、話を焦らされ泣き出しそうなので、仕方なくエタニティも
続ける。

「依頼人と依頼相手を必ず不幸にする能力。怪しいわ。」

「たしかにな」

「何かあれば、連れて帰ってアポリアも」

「さつきからアポリアうるせえよ！」
キレた。

「それどころじゃないみたいだよ」

ゼロが辺りを見つつ言う。

「この感じ……、いる」

不幸少女、弑

「……いる！」

「？何も感じねえぞ……！」

ただただ人の通るだけの大通りで、

ここまで殺気に満ち溢れた場所はあるだろうか。

というほど、否、それ以上の比喩でない限り表現できないほどの殺気。

必ず。

三人を狙っている。

「あーあ」

誰かが口を開く。

このざわつく大通りでさえもはっきり聞こえる。

“誰が言ったかさえも”。

その声を発した人物は、悠々と歩道のどまんなかを歩いてきた。

まるで、女王が通る道をわざわざ通行人らがあけているかのように、道は開いている。

「こんにちは。雑魚キャラ様。」

「……ハジメマシテ」

「あなたは神と等しいと言われてきた野郎様たちですか？」

アンチノミーがゆっくり頷く。

「そうですね。下種野郎様をぶつ殺したら私はどうなりますか？」

「質問攻めだな。」

「答えるよ、クソ野郎様。」

「……君の語力が治つたらな」

「余計な世話だ、偽美男子」

「てめえええええ」

キレたし。

それをあざ笑い、少女は軽やかに逃げ去った。
逃げ、去ろうとした。

「カム トゥ ストップ
時よ止まれ」

時が、止まった。

「私を誰だと思ってるのよ」

「エタニティ、ご託はいいから、ついでに頼む」

「うるさいわね、偽美男子。後でアイスね」
根に持っていたらしい。

そしてアンチノミーは軽く傷ついたみたいだ。

エタニティはブレスレットの付いている右手を止まっている大衆へと向けた。

「フォーゲット
忘却」

一瞬、黄緑色の光に包まれた。

「終わったわ」

「エタニティ！それって、神器じゃないか！」

ゼロが口を開ける。

「アポリアに借りたの」

正しくは強奪といます。

「へ、へえ……」

ゼロも驚くほどだ。

「さて、と」

少女の停止だけ解く。

「君は今まで、何をしたのかな？」
張り詰めた中、アンチノミーはそう切り出した。

不幸少女、弐。(後書き)

愛用のやほー辞書様で何時も英単語を検索するのですが
どうしても読みが出ないんですね。

最終的には知恵袋様で質問することになっちゃって
投稿伸びるんですね。

あ、あと十話突破あぞます。

不幸少女、参。

「君は今まで、何をしたのかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「答えて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「答えっ」

アンチノミーが切れかけた時。

ゼロが後ろから出る。

「僕が変わりに話すよ」

にっこりと、微笑んだ。

つもりだった。

「ひい、ああ、う、う、あああああああ！！」

ゼロの笑顔を見た瞬間絶句し、逃げ惑う。

「いやああ！こないでこないで！こないでええええええええええ」

立てずにいるので、座ったまま後退する。

「ひいひいひい！！！！」

後ろに立っていたエタニティにぶつかる。

「！！ た、助けて！殺される！助けてええええ！！」

足にしがみつき、助けをすがつた。

「そう、見えるのね」

「お願いです！なんでも言います！だから殺さないで！やめて！お

願います！！」

ゼロが面白がつて一歩近づいた。

鬼畜行為である。

「ひいひいひい！えっ、えっ、えっ、エタニティ様！

お願いです！助けてください！まだ死にたくないイイイイイイ

イ！！！！」

パン。

「え？」

エタニティが少女の頬を平手打ちした。

「まだ、死にたくない？」

「そ、そうですよ！」

「それは、貴方が今まで殺してきた人もいったんじゃなかったの？」

「あ……………」

少女はそのことをフラッシュバックする。

「そんな人なんて助けたくもないわ」

足に触れていた手を思いつき蹴りで振り払う。

「私は永遠に、永久に生きてきた。

貴方のしてきたことは、嫌というほど覚えているわ。」

「……………」

そんな人の命乞いなんて助けたくもないわ、とゼロの方へ向かった。

「な、なんなんだよ！お前ら！私だって人間だ！助けてくれないのか！？」

「人間？」

今度はアンチノミーが反応した。

「お前、自分が人間だと思ってるの？」

「は？だって、そうだろ？人間界で生きてる！」

「巫山戯るな！」

「！！！」

「不幸、不幸と言い張って、何人、何十人、何百万人！お前は人を殺めてきた！？」

「あれは、望んだからだろ」

「はっ！」

アンチノミーはやれやれ、と肩をすくめる。

「その死んだ野郎を改心させる俺等にもなってくれよな」
ゼロ、とアンチノミー。

「ええ？僕やつちやっつていいのお!？」

わくわく、と喜びながら満に近づく。

「うひい！やめて！こないで！」

「ひひひっ、楽しいなああ」

「来ないでええええええええええええ！」

不幸少女、四。

逃げ惑う、満。

だが、その逃走はむなしく終わる。

時が止まっているため、通行人はただの壁。

彼女は通行人を押しのけようとぶつかり、倒れた。

“ごん”と痛々しい音と共に。

そして、三人との戦いも、むなしく終わったのだ。

『その子の処理についてですが』
どこからか声がする。

アンチノミーや、アポリアたちは

誰も座っていないいかにも天界のお偉いが座りそうな椅子に
平身低頭していた。

声の主は、神カミと呼ばれる人物。

性別ははっきりしない。男女が混ざっている。

『本人には悪いのですが、

追い追い作ろうと思っていた運命フォーチュンの元にしようと思います』

異議がありますか、と問う。

答えは「ありません」だった。

「罪を償うにとしては軽すぎると私は思います」とアポリア。

『………そうですか。残りの処理は貴方に任せて構いませ
んか？』

「……異議なし」

「それにしても後味が悪い。」
アポリアが言う。

「不満だったら、あの時にいえばよかつたんじゃないの？」
（暇な）エタニティはゼロの髪の毛をとかしては縛るの繰り返しをしていた。

「そんな、神に背くような行為をしると？」

「嘘つく方が背いてると思うよー、ねー、アンチノミー！えへへ」
ゼロが言う。

まあ確かにそうだ。

「そうだな。寝てたくせにな」

「あり？バレてた？」

「多分今日飯抜きだと思っぜ」

「うきやああ（棒読み）」

「それにしても、フォーチュン、だったか。どういうやつなのだろうか」

「え？見た目もまるつきり変わるの？」

「それは……………」

頭を抱える。

「あの人は優柔不断だからな」

「でも記憶は、人間だった頃の記憶はすべて抹消するって言ったよね」

「大事なことだけきいてるんだな」

今度はゼロが暇になったのか、エタニティの髪をいじっている。意外にうまい。

「……………暇だ。俺は仕事に行ってくる」

と言ってアンチノミーは逃げる。

「……………私もだ」とパラドックスも書斎に入った。

「んー、つれないなー、エタニティ！遊ぼうよ」
「何するー？」
親子みたいだ。

不幸少女、四。（後書き）

ごめんね、日常っぽくて。

不幸少女、伍。

翌日、たとえば正しいのだろうか。
それぐらいの時間が過ぎる頃。
また、ゴッドに呼ばれた。

五人は昨日と同じ場所で、平身低頭していた。
『…………頭を上げなさい。今日は昨日の続きです。』

ゴッドに言われたとおり、五人は頭を上げた。

「処理、終わったんですか」
アンチノミーが聞く。

ゴッドは『ええ』と言った。
終わったようだ。

『フォーチュン、来なさい』
フォーチュンと呼ばれた彼女は椅子の後ろから現れた。
顔は包帯でグルグル巻きにされており、うかがえるのは、口だけだ
った。

皆と同じ、ローブに身を包む。
ゼロやアンチノミーと違い、改造も施していない。
目立つのは腰に巻いてあるリボンだけだ。
髪は真っ黒だ。

「フォーチュンです」
ぺこりとお辞儀した。
『あと付け加えですが、私の個人の見解で口調は残させて貰いました。』

特徴的で面白かったのだから
それではこれで以上です、と言って消えた。

「フォーチュンかあ、僕ゼロ！よろしくね！」
「相容れません」

きっぱり。

「まあ、ゆっくり慣れてね」

「ありがとうございます。」

ところで皆さんのお名前を伺ってもよろしいですか？」

「え？ああ……」

一瞬戸惑ったが、曖昧に応えた。

挨拶、自己紹介ともに終了。

アンチノミーは狩りに、パラドックスは書齋に。

個々の自由な時間となった。

「私は何をすればいいのでしょうか」

「趣味とか、ないの？」

というゼロを無視。

「……しゅ、趣味とかないの？」

「趣味ですか、特には……」

「何で僕無視するのおお」

駄々っ子である。

「じゃあ、天界にいるみんなの様子でも伺ってくれば？」

「そうですね、そうします」

不幸少女、伍。(後書き)

フォーチュンの詳しい容姿は、
人物紹介で！

対話と挨拶。 ?

「まだ慣れないでしょ？私が案内するわ」

「ありがとうございます」

「いいのよ、女同士、仲良くしましょ」

「あ、はい」

最初に来たのはパラドックスの書斎。

「ここは書斎というより、私たち共有の図書館ね」

「図書室ではなく？」

「ええ」

ドアをあける。

上、下、右、左、四方八方、本だった。

上はどこまであるのだろうか。

ありすぎて、真っ暗だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

パラドックスは本を取るためにはしごに座り読書をしていた。

「何か読みたい時にくるといいわ。借りていく？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！いいんですか？」

妙に食いついた。

「うふ。いくらでも。私たちは人間と違って永遠の肉体を持っているわ。時間も、ね」

これはエタニティに限らない話だ。

「私も何かよも　へぶっ！」

たまたま床に置いてあった本につまずく。
顔面から転んだ。

「・・・・・・・・・・うっ・・・」

鼻をさする。

「私、やっぱり外にいるわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、はい」

「ほんと、いっぱいあるな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・来るな」

「え？」

（あの人無口だから何か怖い・・・・・・・・）

「・・・・・・・・」

無言で指を指す。

その先にはフォーチュンの足。

の、下に、本。

（だからか・・・・・・・・）

数十分後、フォーチュンが出てきた。

数十分も待たされていたエタニティはゼロと遊んでいた。
やはり親子に見える。

「あの、終わりました。」

「あら？借りなかったの？」

「え、はい。少しパラドックスさんとお話を」

「へえ」

どうでもいいような返事をする。

「じゃ、次アポリアいこっか。」

対話と挨拶。 ?

「アポリアの仕事している場所までは、
普通行くまで一年かかるわ」

「は？」

「天国と地獄の狭間で、彼は死後の生命の振り分けをしてるの」
「はあ」

「あ、一年のことは私が免除してる。時間を縮めてあげてるの。
秘密ね？」

クスリと綺麗に笑った。

エタニティのその微笑みがとても綺麗だった。

「どうした、二人とも」

仕事の手を止めず、アポリアは二人に問いかけた。

「いえ、別にないわ。この子にみんなを紹介して回ってるの。
親切でしょ？うふ」

「今の私にとっては迷惑だ。それに危険だ。帰ってくれないか？」

「ええ、そのつもりよ。……、フォーチュン。」

アポリアについては仕事の後にゆっくり話しましょう」

「あ、えと、いつでも構わないです！」

「ふふ、そう。」

「あの、次はアンチノミーさんですよね？」

「？ ええ」

「いかなくていいんですか？」

「いいのよ。 私も会いたくない時はあるわ」

「？」

フォーチュンは「じゃあ」と手を打った。

「ゴッドに会わせてください」

対話と挨拶。？（後書き）

姿勢悪いのかな

否、悪いんだよね

腰痛い……………

と吐き捨てた。

「はい？」と間抜けな声を出すだけで、フォーチュンは動こうとしない。

「着任したばかりで疲れてるんだろ。質問攻めもこちらが疲れる。休めと言っんだ」

理解したようで、これまた笑っておじぎする。

「そうですね！寝ます！おやすみです！」

「ああ」

「おやすみなさい」

「おやすみい！明日UNOしよお」

「ごめんなさい、トランプ派なんですよ」

玉砕。

対話と挨拶。？（後書き）

さ、てええ……；

お願い。

フォーチュンが寝室に入った頃、

神官の台座の前にはエタニティ、アンチノミーがいた。

『よいですか、お二人……』

「ええ」「ああ」

『あなたがた二人は、人間界に降り、人々の生態調査をお願いします』

「生態調査、ですか」

『ええ』

ゴツドの声が沈む。

空気が重々しくなる。

「何故 唐突にそんな話題を？」

『……無意味、というわけではありません。』

先日のフォーチュンといい、人間界は今不安定にあります』

「……確かにな」

「そこは承知しました。」

ですが、ゴツド様？こちらの天界は残りの四人に任せると？」

『ええ。何か、不満でも？』

質問した側のエタニティが顔をしかめる。

不安要素は二人。

ゼロとフォーチュン。

『……あの二人、ですか？』

「へえ！？え、ああ」

はい、と頷く。

『安心してください。心配には及びません。何かあれば私が身を挺してでも守りましょう』

「身を挺してつて……」
あんた身体あるのか、と疑問が生じたが気にしないでおう。

『資金、服など、あちらで必要な者はもう送っております。
……それと、必要なものが増えれば言ってもらって結構で
すよ』

「そこまでしていただいたのですか？」
とエタニティは感嘆した。

ゴッドは不意に思い出したかのように『あ』と言った。

『通信機器を渡しておきますね』
ぼてり、と目の前に真っ黒の四角い板。
まるでi P h o e のようだ。

『それと、もう一つ』
「？」

『あなたがたの設定は恋人ですので』

「ふざけないでください！」「
『そのいきです』

くすくすとわらい、ゴッドの声は遠のいていった。

名前。

「キヤーツ！見てみて？ねえ、アンチノミー！」

「るせえなあ、設定だからつつつてもそこまでしなくてもいいだろ俺はてめえ見てえなあ女と一緒にいたくねえよ」

「あ”あ！？何かいったか、おい」

「なんでもないです」

さすがのアンチノミーも小さくなった。

「それとよお」

エタニティへの問いかけに彼女は「ん？」と振り向く。
なびいた髪がさらさらと舞う。

「ここは、ゴツド様の言った危険地区は”日本”だ。

せめて」

「名前は変えましょ」

「セリフとんなてめえ」

テヘツ、と舌をだし頭をこぶしでこつんと叩いてみせる。

「それ相当古い」

「たかが数十年前でしょうが」

されど数十年前だぜ、とアンチノミー。

「そうねえ、名前かあ」

うーん、と考える。

「よく考えたらこの名前もゴツド様に頂いたものだよな」

「そうねえ。何千年前に頂いたんだっけ」

「……………俺も覚えてねえなあ」

年ねえ、と嘆息する二人。

見た目は二十代ぐらいなのに。

考えた末、思い浮かばなかったためデパートに入って現実逃避。

「ん~~~~?」

「食ってねえで人探すぞ!」

「だってえ、今のところ平和じゃなあーい?」

美味しそうにアイスを頬張るエタニティ。

「太るぜ?」

「行きましょ」

どんなに年老いても太るのは気にするエタニティだった。

名前？

「名前、名前」

うーん、と唸るエタニティ。

「決めたっ！」

パンツ、と両手を叩く。

「言ってみるよ笑ってやる」

「永野ながの とわ」

「なんかふっー」

ゴツン、と鈍器がアンチノミーの頭にあたる。

ふん、と鼻で笑うエタニティ。

「そういう貴方は出来たの？」

「否」

出来てないらしい。

「矛盾ぼじひか 朱雀すざく！」

「中二くさ」

せめて朱雀はやめてよね、とエタニティが言う。
そしてまた悶々と考え始めた。

「こ、これだあああ！」

子供みたいに声をだして叫ぶ。

「決まったのね？」

紙に書いてある文字は

『矛盾 盾』

「ほござか、じゅん？」

「おう！」

「単純」

「お前に言われたくないけど!？」

「まあひとまず決まりですか。」

「!」「」

天界から聞き覚えのある声。

「長いです。それに茶番を面白く見させていただきましたよ。」

ゴツドには鬼と畜生の素質があるらしい。

「そんなお二人にひとつ依頼です。」

ゴツドの声色が確実に変わるのが分かった。

名前。？（後書き）

二十話ありがとう

改心。

「頼み、ですか？」

『ええ。』

ゴツドは『机の上をご覧なさい。詳しく書いた紙を起きました』と
いった。

そして私は用があるので失礼しますという声は遠のいた。

「ちよつと読み上げてくれねえ？」

「？ ええ」

四時までに街を出て、渋谷を歩きなさい。

「……………」

二人は今の時刻を確認する。 三時半。

「……………仕方ねえ、出歩くか」

「そうね」

渋谷

「いつでも賑わってるわね。帰りたいわ」

「んなこというなよ、とわ」

「……………っふ」

自分の考えた名前を使われ少し喜んでる彼女だった。 単純だ。

「きゃあああああ！？」

という悲鳴が聞こえた。 遠くない。

「おい、エタ……………、とわ！あのビル見ろ！」

「！」

今にも飛び降りそうな人。下には警察。

「つかじやないの!? 説得は飛び降りるの早めるだけじゃない!」

「頼む、俺が説得する」

「分かったわ!」

エタニティは空に手を向けた。そして

「カム トウ ストップ
時よ止まれ」

と唱えた。

勿論、止まる。

「な!? 皆、止まってる……………」

「ああ、俺らとお前以外な」

「誰!? 来ないで!」

と、後ろを向いても誰もいない。だって、アンチノミーは目の前にいるから。

「ぎゃああ!?!」

「……………つとすまんね」

エタニティも後ろの階段から普通に駆けつけた。

「まず君の悩みを聞こう……………先生、かな?」

「!……………なんでしってるの」

「俺らは神様だからね」

嘘を吐く神はいない。

改心？

「……………っは、あっははは！何？神様？っぷ、クスス」
「ああ？」

「今更何神面してんの？ああ〜あ
ふう、と一息。」

「最低」
さいあいつてえ

その言葉は。

ただの愚弄の言葉でなく。

悲痛な、少女の叫びだった。

彼女の目に涙があふれ頬を伝う。

「……………」

その言葉は彼らのどう届いたのか。

「あたしが何年苦しんでたと思うの！？それを今更？」

「……………」

アンチノミーは思い出す。

ゴツドの初めて会った時の一言を。

『私がゴツドです。はじめまして。アンチノミー？』

「……………ふん」

『まあいいでしょう。あなたの基本の仕事は改心です』

「はあ？」

その返事にゴツドは笑う。

『いいですか？』

「あ？」

『あなたの仕事は、“改心”ですよ』

あの言葉には、今まで“人々の改心”と勘違いしていた。

あれは、自分を更生しろという意味も入っているのだろう。

「もうこうなったら“フォーゲット”を使いましょう」

「・・・・・・・・いや、ダメだ」

「しつかり、立ち向かわねえと」

「・・・・・・・・っは」

アンチノミーは彼女に手を向ける。

「白と黒の世界へようこそ」

改心。？（後書き）

次の話では、ゴッドでございますよー

改心？

「なっ!?!なによここ!?!」
世界が一面の黒と化す。
が。

『おやめなさい』

「……………この声はゴッド様!?!」

『今そちらへ伺いましょう。天界は私の姉つえに任せました』

(姉いるのか)

「……………つて、え?向かう?」

しゅう、と音を立てモノクロの世界が消える。

時はまだ止まったままだ。エタニティがきつそうな顔を見せる。

「……………きつくなかないわ、お腹すくだけよ」

キツイらしい。

屋上に光が指す。アンチノミーがこれを見るのは二度目だ。

「……………ゴッド、様」

とん、と靴が着陸する音。そこにいたのは

スラリとした長身のスタイルが美しい女性。

髪はとても長く今にも地につきそうだ。そして何といても色。

透き通るような金髪だ。

「これで会うのは二度目ですね、アンチノミー。」

エタニティは初めてでしょうか?」

「……………この声……………ゴッド様!?!」

「ええ。別に皆さんに顔見せないのは面倒だからなんですけどね」
なんて神だ。

「エタニティ、いえ、ここではとわと呼びましょう。」

時を止めるのは私が変わります。疲れているのでしょうか？」「エタニティは素直に首を縦に動かした。それを見、ゴッドはただただ微笑むだけで。

「ありがとうございます………」

そうやってエタニティは術を解いた。

「私のことは、下界では神乃と呼んでください。よろしいですね？」

「はい」

フルネームは全夜 神乃と言っらしい。

「ちょっと、あたしを差し置いてなに楽しく会話しているわけ！？」「と今にも飛び降りそうな彼女が叫ぶ。
すると

「お黙りなさい」

静かに怒る、ゴッドがそう言った。

「私を与えた大切な命をそうも簡単になくそうとするなんて」

はあ、と片手で顔を覆う。

「な、何よ！偽善？どうでもいいわあ〜」

「どうも、人々は廃れたようですね……。改心の余地はないでしょう」

そうやって彼女に近づく。

「こ、来ないで！降りるわよ！」

「降りてみなさい。貴方にそういう覚悟がお在り？」

「………」

「あの人、ゴッド様も相当ストレス溜まってらるだろうね、アンチノ

「ミ

「ああ、きつとあいらつほのじやだるじやな

「めんどくさいもんな」

改心。？（後書き）

ゴッド様しゅっじーん

改心？

「さあ？飛び降りれないのですか？」

神が人を死の淵へ追いやっている光景は見れないだろう。

ここにいれば別だが。

「どうしたのです。私が落としてあげますか？」

片手を少女の方へ向ける。少女は驚き、つかんでいる手すりの力をさらに強くする。

やはり怖いのだろう。

「さあ、さあ、さあ！」

アンチノミーたちはというところ

「夕飯何がいいかしら。今日は冷えるし、スープとかいいわね」

「そうだなー、あんまあつつくねえのにしてくれよ」

無視である。ガン無視だ。

あの行為はほぼゴッドのお遊びと言える行為なので殺しはしない。

死んだとしても、エタニティ時を巻き戻すか、ゴッドに蘇生させればいい。

かと言って死ぬのも殺すのも悪いことなのだが。

「でもねえ、あ、簡単だしお茶漬けにでもしましょ」

「おお、いいな」

お前ら夫婦か。

「ほらっ！」

ドン、と人が押される音。

「……あ」

少女は手すりから手を離し、落ちてゆく。最も落としたのはゴッドだが。

「今更命乞いは効きませんよ」

地面が近づいてゆく。

「・・・・・・・・・・や、やだ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・え、し、死んで、ない？」

「どうでしょう？味わえましたか？死の恐怖。」

「・・・・・・・・・・」

少女はゴッドをにらみつつも素直に肯定する。

「それでも貴方は死を選ぶといえますか？」

「言いません」

きっぱりとそう答えた。

ゴッドはほほえみ、

「よろしい」

と言った。

「なんか気分悪いわねー、やっぱりお茶漬はやめましょ」

「お前ちよっとは空気読めよー!!」

改心。?
(後書き)

連投します

私だって休暇は欲しいのです。 <挿絵あり>

「　　で、お二人」

ゴツドは二人を見下ろす形でいる。

当の二人はゴツドの足元に正座をしていた。

「どうして改心する人間を探しにいかないんですか!!!」

「は、はあ、まさかゴツド様がいらっしゃるとは思いませんし．．．
「」

「気が抜けてます!!!それに私は神乃ですからね!？」

「すいません．．．」

「もうだめですね!!!先程も伝えましたが天界は姉に任せました。
「」

>i28327—2207<

「と言う訳で私も一緒にここにいます!!!」

「」

一息。

「ええええええええええええええええええええええええ?!」

〇　〇　〇　〇　〇　〇

「ん~~~~、あつたまりますね、オニオンスープ
結局お茶漬けはやめたのだ．．．でなく。

「ゴツド様あ、本当に居座るんですかあ」

「」

無視。

「か、神乃．．．様？」

「……ズズー」

「か、神乃！」

「はあ〜い」

（めんどくせえええ）

そしてスープは二杯目と突入したのである。

「居座ると言ったら居座ります」

「でも、天界から離れるのはまずいんじゃないか……」

「ですから、姉に任せたと……」

「そ、そういう……問題？」

ゴッドは「そっだ」と拍手かしわでを打った。

「明日は買い物に行きましょう」

やる気あんのか、と突っ込みたかったエタニティだった。

私だって休暇は欲しいのです。 <挿絵あり> (後書き)

挿絵があげたかっただけ

仕事と買い物は別物。

「か、買い物は偵察の一環ですからね?!」
両手にちやつかり袋を持ったゴツドが言う。 説得力は、ない。

「……………神乃……………」

「……………私だっておやすみ欲しい……………!」

ゴツドの言葉が詰まる。 何かを見つけたのだ。

「お、美味しそうです」

シヨーウィンドウのパフェだった。

「仕事関連じゃないのかよ!」

エタニティはしまったという顔。

ゴツドはシヨーウィンドウ越しに震えている。 小声で「いいじゃないですかあ」と聞こえる。 子供かよ。

アンチノミーはというと、ひとりで仕事なのだ。

彼曰く

「女の買い物は嫌だ」

らしい。

(女の私でもこの人との買い物は金輪際嫌だわ)
そう思ったエタニティだった。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「 しゅう、りょう」

真っ白の世界から帰還する彼。 目の前には倒れている男性がいた。

「ったくよお、倒産だからって自殺とか勘弁してくれよな」

場所はどこかの屋上だった。 廃ビルだ。

「さて、帰るか」

「ま、待ってくれえ」

「ああん？起きるのはええな」

がっしりとアンチノミーの足をつかむ。まるでゾンビだ。

「何故、何故私を生かす……希望など、無いのに……」

「

ぼろぼろと情けなく涙をこぼす。

「希望？んなもん作れよ」

そういつて彼の足を振り払いさっさとビルから出て行ってしまった。

アンチノミーはやはり何か、心がつつかえていた。

「ツチ、記憶も抜いときゃよかったぜ」

仕事と買い物は別物。(後書き)

連投します

姉。 <挿絵あり>

天界

「全くゴッドは下に降りても自由ね」

彼女はゴッドの姉にあたる。

はつきり言って、ゴッドとは正反対。 人望もあるし、皆を纏める力もある。

なのに、何故。 ゴッドが神を継いだのか。

「ねえ、何で？」

「まあ、いつの間に？ふふ。好奇心旺盛なのね絶無」

「ゼロです〜〜！」

ゼロがむっつりと膨れているのも無視し、

「それはね」

冷静な淡々とした声で続けた。

「人間だった頃の記憶があるからなの」

「そしたら、幾ら纏められても、人望があっても、天才でも、情を入れてしまえばおしまいなのよ」

「……………記憶」

「基本はゴッドが忘却させてくれるわ」

「フォーゲット！」

「あら！ごめんなさい」

にっこりと微笑み、ゼロの頭を撫でる。そして

「そう、私は所詮人間なの」

悲しそうな目でそう言った。

「……………」

「さー！彼方あいつで運命と遊んでらっしゃい」

「えー、やだあ、フォーチュン僕のこと嫌ってるもん」

「苦手なだけよ。……まあ仕方ないわ。それじゃあお手伝いお
願いできるかしら？」

「うん！僕何でもしちゃうよ！」

「じゃあ黙っててね」

「!？」

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「私の姉？……そうですね、私と姉は正反対ですね
とても人望がありましたよ、と言った。

「……お前ちよつと神やめろよ!！」

> i 2 8 3 8 8 | 2 2 0 7 <

新たな敵。(前書き)

この話から始めた、

「あとがきでギャグ漫画(もち、黒、白)を載せる」企画!!

絵と内容のセンスないけども

どうかよろしくです!

新たな敵。

「これは……」

夜中、暗い部屋の一室でゴッドはそうつぶやいた

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「膨大なエネルギー反応？そんな、ファンタジーっぽいのあるんですか？」

「ええ。たしかここらへんから感じました」

三人が歩いているのは秋葉原。 いかにもコスプレをしている人などなど沢山居た。

そしてゴッドが指を指した方向は

「占いの館？」

「こういうことになるなら、姉と変わればよかったですね」

「お姉様の得意分野で？」

「え！？……いえ、ちょっと、ね」

うつむき加減にそう言った。

「？……まあ入ってみましょう」

「私とエタニティでいきます。アンチノミーは待機で」

「何か最近俺ばかり除け者じゃないっすか？」

「男が占ってもらっても意味はありません」

「ありますからね！？」

アンチノミーを無視して二人はサクサク進んだ。

「ここです」

と、ゴッドが足を止めた場所は、とてつもなく行列のできている場

所だった。

「……待ってたら一時間はかかりそうですよ」

「仕方ありません。」

そういつて、ゴツドは息を吸う。

「通しなさい」

すると並んでいた人間は全て左右に散り散りになり二人の道を開けた。

「ありがとうございます」

にっこりと微笑んで足を進めた。

「お次の方あ」

不気味な声が轟いた。

「私と彼女です。」

「……一人までだよ」

「いえ、今回は貴方とお話がありやって参りましたの。」

「……へえ、まあ座れよ」

新たな敵。(後書き)

> i28423 — 2207 < テクスチャが酷いが気にするな

新たな敵。？（前書き）

今回はおまげが二つ

新たな敵？

「単刀直入に行きます。この水晶どこで手に入れたのですか？」

「……これは、自作だよ」

「嘘おつしやい」

「嘘じゃねえ！ちゃんと俺が靈気を込めて作ったんだ」

だん、と机を叩く。

「証拠をみせてご覧なさいよ」

「消……扱お？」

「きゃああ?!」

後ろでエタニティの叫び声が聞こえた。誰かが押さえつけている。

「へ、へへへ、遅かったじゃないですかあ手こずりましたよお」

「フン」

男の鼻を鳴らす声。

「……誰ですか？エタニティを離してください」

「オレだ。オレオレ。覚えてねえ？」

「……申し訳ありませんね。記憶というものは」

そこはゴッドははつとする。

「あ、あなたは」

「そう、オレは」

「閻魔大王」

「……お久しぶりです、ね」

「ぎこちねえなあ、オレたち幼馴染だろ？」

ギャハハハと汚く笑う。

そして、エタニティを離れた。

後ろからはアンチノミーが駆けつけたのがうかがえる。

「ここでネタ明かしでもしようじゃねえか」

「ネタ、明かし？」

「ああ」

彼は再びギャハハと笑った。

「水晶をお前から盗んだのも、日本で事件が多発してるのも、オレの所為だああ」

「な!？」

ゴツドは口を抑え、絶句する。

「何故です!？そういう方たちを取り締まる役に貴方も入っていたはず!」

「あああ?いいか?聞け。天と地は対なる存在なり」

「そんなこと両親から伝わっています」

「んならよお、オレ、お前の言う事聞かなくてもいいんじゃないねえ？」

「!?!?!」

「ふひひ、嘘だよ。ちよつとした御遊び」

ゴツドは閻魔をキツと睨む。

「遊びでも、私は貴方がした行為を許しません。何時か、何時か! 貴方に返るでしょう!」

「ふん。そんなときやまた返すまでだよ」

「……………つく」

アンチノミーは思った。

(こんな悔しそうなゴツド様を見たのは、久々だな)

それは、アンチノミーがまだゴツドから力を貰う前の話。

新たな敵。 ? (後書き)

> i 2 8 5 6 6 | 2 2 0 7 < > i 2 8 5 6 7 | 2 2 0 7 <

メガネエタニテイです。

メガネ女子いいよ、メガネ女子

アンチノミーとコッド。(前書き)

今回はおまけがてんこ盛り!!

(雑絵が増えただけ)

アンチノミーとゴッド。

彼は元々、下級天使でそもそもゴッドと直接顔を見合わせたのも矛盾という能力をもらつまで一片たりともなかった。
彼が彼女に会った、否、呼ばれたのは

「ほう、下級天使でいい仕事をしている奴がいる？」

大天使+ゴッドの会議で出された案に彼の名が挙げられたのだ。
この会議では天使のランク付けが改められた。

「ええ〜。わたしの仕事場にいる彼なんですけどお〜」
妙にゆっくり喋る彼女。彼女は、西の天使。

天界は四つの区間に別れていて、西・東・南・北と区分される。
そのさらに上の場にゴッドがついていた。

「赤毛の男の子ですねえ〜。仕事熱心で〜」

ニコニコと話す彼女。

「赤毛？ああ、天界では珍しいんじゃないか」

「そうですね〜。人間の血が一片たりとも混入してませんからねえ〜」

「そうですね。それでは西の天使。今度例の彼を連れてきてはくさいませんか？」

「勿論ですよ〜。……ちよおつとクセのある子ですけどねえ〜」

「……………?」

〇 〇 〇 〇 〇 〇

こんこんと乾いた音が部屋に響く。 誰かがドアをノックしたのだ。

「はい」

今開けますよ、とゴッドは席を立つ。

ドアの前に立っていたのは例の赤毛の子。

「こんばんは。夜遅く来てくださってありがとうございます」

「いえ」

彼はそう、はにかんだ。

「立ち話もなんですし、どうぞ入ってください。お紅茶とコーヒーの方がお好き？」

「あ、いえ。お構いなく」

「そう。コーヒーにしておきますね。私の作るお紅茶は甘いと批評されてるの」

クス、とゴッドは笑う。 彼も微笑むように目を細めた。

「何日かここで助手をしてもらいますよ。もしかすると昇格するかもしれません」

「はあ」

彼は嬉しくないのか、曖昧に返事する。

「嬉しくないのですか？」

「いえ、俺なんかがつて実感が湧かなくて」

「そうですか。でも今日は先程も申し上げたとおり遅いです。」
「つつこりと笑い、首を傾げてみせる。

「隣の部屋をお使いなさい。何かあれば呼べるようにです」

「ありがとうございます」

「それでは、おやすみなさい」

「はい。良い夜を。」

「ええ」

アンチノミーとユツド。(後書き)

> i 2 8 5 7 1 — 2 2 0 7 < > i 2 8 5 7 2 — 2 2 0 7 <
> i 2 8 6 4 1 — 2 2 0 7 <

ゼロの絵についてはクオリティ欠けてますよね

まあ俺にクオリティなんて追求しないでよ！って感じなんですg)

ry

アンチノミーとユリッド。？（前書き）

今回はおまけなしです。

アンチノミーとゴッド。？

「おはようございます」

時間は人ですれば約五時。 天界の朝は早いのだ。

数時間もしないうちに彼は着々と仕事を片付け、ゴッドに一目置かれていた。

だが、ゴッドが気になること。

彼の目に、光がない。 全て同じ。 平等に見ている。

最も・

平等といっても、全てゴミを見るような目で。

彼はなんとかしなくては。 そう彼女は思った。

幾ら、仕事ができても。 この天界^{せかい}では心でモノを左右することがある。

死者たちの地獄行きか天国かなどで情を入れてしまえば終わりなのだが。

それにゴッドのすぐ下に今は就いているのだから、否、それ以前に天使が感情を持たなくては天使ではない。 それは悪魔というものになる。

(まあ、でも暫く様子見ぐらいはしましょう)

そう思い、椅子に腰掛け、目を閉じた。

「ゴツド様！ゴツド様！！！」

「！」

目を閉じた所為で、そのまま眠りについたらしまったのだ。
それだけで済まない。

「大変です！外に出てください！」

「・・・・・・・・・・何事ですか？」

眠りを妨げられた所為で、少し不機嫌気味で応えた。

「いいから、外をご覧になってください！！！」

「・・・・・・・・・・？」

渋々、ゴツドは書斎の窓から外を除く。 その光景は。

「なん、ですか・・・・・・・・・・？これは」

「貴方の助手になっていた彼が行成暴走を始めて・・・・・・・・・・、今
天界がめっちゃめっちゃなんです！」

「・・・・・・・・・・な」

ゴツドは絶句する。 普段綺麗に整えられている天界が滅茶苦茶に
破壊されていた。 瓦礫の山だ。 所々で出火が見られる。

「・・・・・・・・・・今すぐにも修理を！火も消して！」

「了解しました！！！！！」

アンチノミーとコッド。？（後書き）

小一時間考えた末、おまけはなしです。
次は挿絵 + おまけあります

思い出と会議。

神殿にある王座の前に寝かされていたアンチノミー。

あの後、暴走はゴッドによって強制終了。その反動で深い眠りに入っているのだ（死んでません）。

「全く。寝ている顔は良いんですけどね」

「お言葉を返すようですが、ゴッド様？此奴の処置はどう致すおつもりで？」

「そうですね。……進まないのですが、計画が進行していた使徒の素材にでもしましょう」

「……正……気ですか！？ 奴の記憶を全て奪い、何もかも変えるのですよ！？」

「覚悟の上です。」

「貴方様の力も薄れるのですよ！？」

「覚悟の、上です」

強く、そう、断言した。

そうして彼は深い眠りに堕ちている中矛盾へと姿を変えたのだ。否、生まれ変わったのだ。

が。彼は本当は起きていた。そして、力を分け与えたあと。あの顔を見た。

悔しそうに、寂しそうに、悲しそうに。

泣いているゴッドを。

「私がつと、もっと早く気付いていればこんなことは、無かった。私が、私が無力だから……」

そう言いつつ彼女は彼に矛盾という力を分け与えていた。

「アンチノミー？」

「!?!? ……え？ああ、すいません」

ここは天界。三人は人間の生態調査を中止し、戻ってきたのだ。

「容態が優れないのかと思いましたよ。今日の夕食は会議も兼ねます。……気が乗りませんが。皆さんにも伝えましたが、大広間にて行いますよ。時間はいつもどおりです。遅れない様にしてくださいね」

ゴッドが個々に回っているらしかった。

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

「それでは、皆さん。よくお集まりになりましたね。」

「いいえ……。お言葉を返すようですが一つ宜しいでしょうか?」

「何でしょう、アポリア」

「……。あなたのような方が簡単に人々に姿を見せたり、……否、私たちにもですね」

「いいじゃないですか。誰も座っていない王座に顔を下げるなんてもうやめましょう」

立っていたゴッドはゆっくりと腰を下ろす。

「ツケ。上で暇してたくせに」

「なんですか?アンチノミー」

「いいえ?」

「本題に入りましょう」

食事も軽く終えたところで彼女はそう切り出したが。

「あ……。…」

とフォーチュンが話を区切る。

「申し訳ありません……。ですが、ゼロは何処へ?」

「……。彼については少し伏せましょう。それでは本題です」

ゴッドは素直な気持ちも混ぜ、彼らに話した。

閻魔のことも、今の状況がいかに不利かも。盗まれた水晶も。

「私の話したかったことは以上です。」

「盗まれた水晶は、予知の水晶ですね」

「ええ。元々私の能力のサポートをしてくれるものだったので、能力はエタニティに移行したため譲ろうと思ってたんですよ」

「……………わ、私にですか！？お、恐れ多い……………」

「……………まあ話したかった内容は以上です。この会議はお開きにしますよ」

そついでゴッドの指示により、会議は終了された。

視察。

会議が終わり、ゴッドは一人大広間に残された。

「ゴッドちゃん」

「………ゼロ」

「ただいま」

「おかえり」

ゼロは棒アイスのようなものを舐めていた。まあ多分アイスだろうけど。

「また人間界に降りたの？もう今度はちゃんと出席して頂戴」

「ほらあ、二人だけだとため口になるう」

舐め終わったアイスの棒をゴッドへと向ける。

「………それより、今度からもう免除しませんよ」

「そこをなんとかあ」

「駄目です」

「むん。まあ報告だよ」

ゼロは棒をコイントスの原理を使って空中へと投げる。その棒は一瞬にして炎に包まれ灰

となり、焼けて消えた。

「下級天使かな？二人程度墮天したよ」

「二人ですか………」

「西ではね」

「………」

意味ありげに言う。そしてまた知らずのうちにアイスを口に含む。

「西で二人、東で一人。北で一人。南で 九人かな」

「まあ大分少ないでしょう」

ゼロは「まあ」と続ける。

「南はスパルタだからね」 墮天数も多いたるおに「

「今度言っておきますね」

「ん」

立ち去るうしろすゝろに向け、ゴッドが言う。

「明日は」

「ん？」

「明日は……地獄を視察してきてください」

視察？

「明日は……地獄を視察してきてください」
「地獄？」

「ええ。例の一件で不安でして」

「無理だよ」

「な……」

バギイと棒を噛み砕く。勿論口からは、血が出ている。

「その 例の一件で警備もキツチキチ。」

「それはあなたのペテン師でカバーでき」

ゴツドが言葉を止める。

「そう。地獄にはあの子達がいるよ」

「悪食娘と完璧娘がね」

「クسس。来ないね、来ない！偵察兵」

「仕方ないじゃない。私たちに戦うことが不可能なんですもの」
ゴリイゴリイと響く痛々しげな音。 この音は。

悪食娘が人を食している音である。

「全く貴方も粗食ね」

「褒めてるのかい完璧娘」

「ふん」

> i29244 — 2207 <

悪食娘は悪口やらなんでも喰らい尽くす、そのままのとおり悪食娘なのだ。

完璧娘は 完璧というわけではない。 不可能がないだけなのだ。

「私の能力、ちから不可能インポッシブルによつて」

そんなありえない彼女らが守っているこの門。 地獄への門。

骨まで奇麗にしゃぶり終えた悪食娘が言う。

「ゼロつて子、来ないねー。 あいつ絶対地獄逝きだよ」

「天界にいるなんて信じられないわ」

悪食娘は逃げ惑う人間の頭をつかむ。

「にーげーんーなー」

そしてそれを。 思い切りもぎちぎる。

「おお？ 若いからいきがいい・・・、うん 美味しいね」

ゴリイと頭から食べる彼女。 そして頭の中に指をぶっ刺し、ぐるぐるかき混ぜる。

「ここがまた美味しい」

ぺろりと舐めてみせた。

「さあ来いよ、天使達。 アタシが全部喰らい尽くそう」

視察。？（後書き）

挿絵ミスった

悪食ちゃんの口元と指に血を忘れました

事情と心情。

ゼロが去ったあと、ゴツドは自室でぐるぐる歩くと歩き回っていた。

「ゴツド？」

「!？」

後ろから不意に声が掛かる。その声の主は姉。

「……お、お姉様でしたか」

「どうしたの？最近悩み事でもあるの」

「いえ。ご心配無く。何もありません」

「……そう……」

彼女は寂しそうにそう呟いた。

「ゼロ！」

こちらでも声を掛けられた人物。

「……どおしたのお」

声を掛けたのはアンチノミーだ。その後ろにはアポリアも見える。

「会議に出ねえなんてお前らしくねえ。飯にありつける！つつつ

ていつつも出るのに」

「そうだぞ。しかも無断欠席なんて言語道断」

「いーんだよ。僕は。僕はね。」

「なんだそれ？」

持っていたアイスの棒をバキリとへし折る。勿論血が滴る。

見るからに彼らのことを不愉快そうに見ている感じ。

そして小さな声でこういった。

「僕は君たちと違うんだ」

その声が彼らに届くことはなかった。

ゼロ。絶無。虚無。

彼と呼んでいいものか。彼にはマイナスな名ばかりついていた。そんな彼のまさに対。ゴッドがいる。

彼は破壊を続け、彼女は救世を続けた。延々に報われぬまま。

そんな二人が同時に同じ場所に居れば何が起こる？

無論、それは何も起きない。

平和。

話が届く場所にいるのなら、彼は彼女が壊してよいと言うものだけを壊せばいい。

話が届く場所にいるのなら、彼女は彼に救って欲しいものを救えばいい。

ただ単純なこと。

だがそれが？

もしも、もしもだ。

一つの力が弱まりつつあれば

？

事情と神情。

人は死を悟すとどうなるか。

そして　その上の存在、神はどうなのだろうか。

自身の手を見つめるゼロ。

指先は黒く変色し、腐敗し始めている。

「……………」

対の存在は近づき互いを知るのがいいが。

それは同等の力をもっていればの話。

対の存在のどちらかがバケモノ並みに強ければもう一方は消し去られてしまう。

「……………死」

そういつて強く握る。

“元々地獄の者が天界にいる自体、体へ何かしらの影響を受けている”

その影響の結果がこれだ。

「……………帰らないと」

我が身滅ぼすのを選ぶのか。仲間と共に死を選ぶか。どちらにしても選ぶのはゼロ本人。

「……………僕は死なない。絶対に。その存在を偽ろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2518s/>

黒、白。

2011年11月7日21時04分発行